



■図1、写真1

図1は歌川広重「隷書東海道・四日市」(四日市市立博物館所蔵)。東海道を行く旅人は、日永にある伊勢参宮街道との追分(分岐点)の鳥居を参拝することで、街道のはるか先にお伊勢参りが済ませられるという習わしがあった。鳥居の両脇には追分まんじゅうなどの土産物売りの商店の様子が描かれている。写真1は現在の日永追分の状況。鳥居は幾度となく立て替えられた。



あの頃の風景

東海道編 第2回 公害のまちから快適環境都市へ 四日市

Consultant 会誌編集専門委員会



■写真2、3—四日市港
写真2は昭和46年頃、コンビナートから四日市港に工場排水が流れ出す様子。その後水質が改善され、埠頭に魚釣りを楽しむことも出来るようになった。(現在は保安上立入りが制限されている)



■写真4、5—小学校の生活
写真4は昭和40年代、教室に入る前にうがいを励行する小学生。教室には空気清浄機がおかれ、活性炭入りのマスクも配布された。現在では大気汚染が改善され、安心して勉強やスポーツに励むことが出来る。



定期的な市場取引が行われた名残から、『〇日市』『〇日市場』などの地名が残る場所は全国随所にある。三重県一の規模を誇る都市、四日市も例外ではない。文明5年(1473年)の外宮序宣に「四ヶ市庭浦」の地名が出てくることから、ここでの定期市は、少なくとも室町時代から行われていたと考えられる。さらに江戸時代になると、市場町・湊町であった四日市には「宿場町」「陣屋・代宿所の町」「東海道と伊勢参宮街道の追分」としての役目加わり、北勢の行政・商業の中心地として繁栄した。

幕末から明治にかけては、菜種油や肥料などの生産・取引のほか、現在でもわが国における土鍋のシェアの80%を占めている萬古焼、生糸や紡績を中心とした繊維など、工業都市としての役割も担うようになった。

第二次大戦後、海軍用地として使用されていた土地は石油コンビナートに姿を変え、四日市市は全国有数の石油化学工業都市として歩み始める。高度成長期に入り、生活が豊かになる一方で、空や海は工場の排煙や排水で本来の色を失い悪臭が漂いだした。コンビナート近くの住民の間には、ぜんそくのような症状で苦しむ人たちが激増した。これが後に4大公害病の一つと言われる「四日市ぜんそく」である。

今日でも四日市市は日本有数のコンビナート地帯であり、三重県最大の都市である。しかし、脱硫装置の普及、より硫黄分の少ない原油への切り替えや高煙突化により、青い空を取り戻し、大気汚染はもちろんその他各種の環境基準を多くの地区で下回るまで改善された。

近年、中国など急激な経済発展を続ける新興工業国では、昭和40年代の日本が経験したような深刻な公害が顕在化しつつある。同じ過ちを繰り返さないためにも、四日市に象徴される苦難の公害の実態とそれらを克服した貴重な経験・技術を世界に向かって発信し、人々の安全で快適な暮らしの実現に貢献することは、わが国に課せられた重要な使命であろう。

平成17年2月、四日市市は分権時代に対応した自立した都市づくりを目指して、隣接する楠町と合併し、新たなスタートを切った。今後も四日市市の環境宣言である快適環境都市を目指して、環境に配慮した快適なまちづくりが進められていくことに期待したい。



■写真6(上)、7(左)、8(右)—コンビナート
写真6、7は昭和40年代、煤煙を吐き出すコンビナート。低い煙突のために煤煙が拡散されずに滞留した様子が分かる。現在では、青空を取り戻した。

今回は・・・

東海道五十三次、十六番目の宿場町「由比」。古くから地すべりによる災害が度々発生しており、現在も対策工事が進められている。交通の難所としても知られた頃と、国内有数の交通の要所である今を対比する。

<写真提供>
写真2、3、4、8：四日市公害資料館
写真6：中日新聞社
写真7：澤井余志郎
写真1、5：山下茂



■図2—国土院発行の二万五千分の一地形図「四日市東部」
地図の中央左が市の中心部。左は昭和34年頃で、市の南と北側に自然の海岸線が形成されている。右は現在(平成11年)で、海岸線は埋立てによりその姿を大きく変えている。